書いて味わう
正信偈

shoushinge

帰命無量寿如来
南無不可思議光

［書］山本 慧（西本願寺浄書室）
［企画］本願寺出版社東京支社
企画委員会

筆でもペンでも練習できる！
書くことによって理解が深まります！
読み下し・現代語訳・解説付の真宗入門書！

本願寺出版社

本書のねらい

「キミョウムリョウジュニョライ」から「帰命無量寿如来」に

「正信偈」は、浄土真宗の門信徒が朝夕のお参りや、法座、葬儀で拝読する、なじみの深い聖典です。幼い頃より耳から覚え自然に口から出ていたという方も、いらっしゃるのではないでしょうか。その「正信偈」を初めて文字で読んだ時の思いとは、どんなものだったでしょう。さて今度は、書いてみましょう。初めて読んだ時と重なる思いがわいてくるのではないでしょうか。

一方、初めて「正信偈」に触れる方には、親鸞聖人のみ教えが多くの人びとの生きる指針となっている意味を味わっていただく、きっかけとなればと思います。

書いて味わう

本書では、書くことにより味わいを深めることを目的として、編集しました。

実際に、一文字一文字、親鸞聖人が注意深く選ばれた、深い意味を持った偈文を書くことで、親鸞聖人が「正信偈」を執筆された時に込められたおこころに近づければと思います。また、文字を書くことは、読む場合より速度が遅くなるので、それだけで味わいも深まります。そこで本書では、書き下し文や現代語訳・用語解説によって、文字や熟語を味わうことに重点を置きました。

書体は、なじみ易いようになるべく現代使用されているものとしました。

「正信偈」は百二十句の偈文ですが、いくつかの段落に分かれております。ご自身のペースで書き進んでください。

本書の使い方

〈文字をなぞって〉
経文の横にある文字をなぞりながら、書き進めてください。筆記用具は、筆・筆ペン・ボールペン・鉛筆・ペン、いずれでも使いやすいものでお書きください。

〈部屋の場合〉
直接、半紙や用紙に書く場合は、最終ページ掲載の枠を下敷きにお使いいただくと、配字が容易です。

〈研修会・法座などで〉
テキストとして活用していただければ、より学習が身に付き、さらに書くことで予習・復習としても活用できます。

〈お聖教へ心がけ〉
お聖教を開く時は、両手で経本の下部を掬り、目の高さまで静かに持ち上げて、いただいてから開きます。閉じた後も同様です。また、直接床や足下には置かず、机やものの上に置きます。
これは、み教えに対する敬いの思いを表します。そして、インドから中国を経て日本まで教えを伝えてくださった方々のご苦労、印刷のない時代に、一文字一文字、書き写された書物への敬いの姿勢です。
（印刷された経本にも同様の配慮をお願いいたします。）

『正信偈』について

「正信偈」の由来

「正信偈」は、浄土真宗の宗祖・親鸞聖人によって著された『顕浄土真実教行証文類』（『教行信証』）という聖典の中にあります。七言六十行百二十句の漢詩で、正式には『正信念仏偈』といい、念仏を正信する偈（うた）という意味で、浄土真宗の教えの要が凝縮されています。これを朝夕の勤行として用いるように制定されたのは、約五百年前に本願寺第八代宗主となられた蓮如上人です。

「正信偈」の構成

「正信偈」は、大きく三段に分けることができます。

まず、冒頭の二句「帰命無量寿如来　南無不可思議光」を「帰敬序（偈）」と呼びます。「限りない命の如来に帰命し、思い量ることのできない光の如来に帰依したてまつる」と、阿弥陀如来からいただかれた信心が、この二句に表明されています。この二句はともに「南無阿弥陀仏」と同じ意味です。

続いて「依経段」（法蔵菩薩因位時～難中之難無過斯）は、『仏説無量寿経』によって阿弥陀如来と釈尊の徳を讃えられた章といえましょう。「仏説無量寿経」は、親鸞聖人が真実の教えが説かれているために大切にされた経典で、「依経」とは「この経典に依る」という意味です。

帰命無量寿如来

この章では、まず阿弥陀如来がすべての衆生を救う願いを起こし建立されたお浄土と、そこに生まれる道が説かれております。続いて、釈尊がこの世に出られた理由は阿弥陀如来の願いを説くためであったことを讃え、最後に阿弥陀如来からいただいた信心の徳が表されています。

後半の「依釈段」（印度西天之論家～唯可信斯高僧説）は、インド・中国・日本と三国にわたって、この教えを伝えてくださった七人の高僧方（七高僧）を讃える章です。

七高僧とは、龍樹菩薩・天親菩薩（インド）、曇鸞大師・道綽禅師・善導大師（中国）、源信和尚・源空聖人（日本）、を指します。各高僧方は、釈尊の説かれた教えを、それぞれの時代の中で自らの生き方を通して検証され、また、著書（論釈）によって独自の発揮をしてくださいました。

味わいを深めるために

「正信偈」は、偈文として文字数が限られているために省略された文字や表現があり、理解しにくいところもあります。詳しくは解説書を読まれたり、お聴聞を重ねて理解を深めてください。本願寺出版社刊行書籍では、『正信偈を読む』『正信偈入門』『やさしい正信偈講座』『ひらがな正信偈』などが参考になると思います。

南無不可思議光

＊『正信偈』偈文はやや平たく仕上げています。

帰命無量寿如来
南無不可思議光
法蔵菩薩因位時
在世自在王仏所

●書き下し

無量寿如来に帰命し、不可思議光に南無したてまつる。
法蔵菩薩の因位の時、世自在王仏の所にましまして、諸仏の浄土の因、国土人天の善悪を覩見して、無上殊勝の願を建立し、希有の大弘誓を超発せり。

●現代語訳

限りない命の如来に帰命し、思いはかることのできない光の如来に帰依したてまつる。
法蔵菩薩の因位のときに、世自在王仏のみもとで、仏がたの浄土の成り立ちや、その国土や人間や神々の善し悪しをご覧になって、この上なくすぐれた願をおたてになり、世にもまれな大いなる誓いをおこされた。

味わう

○**帰命／南無**　（南無）とは梵語（ほんご）ナマスを漢音にしたもので、（帰命）はその意味を漢訳したもの。阿弥陀如来に対する帰依信順の思いを表すとともに、その思いそのものが阿弥陀如来から私への喚びかけでもある。「故を忘ず仏にする、我を頼りにせよ」という喚び声に自らの一切を任すことが、この一語に表されている。

○**無量寿／不可思議光**
梵語アミターバ（無量の寿命）の漢訳が「無量寿」、アミターユス（無量の光明）の漢訳が「不可思議光」。

観見諸仏浄土因
国土人天之善悪
建立無上殊勝願
超発希有大弘誓

○**如来**　真如（真理）の世界より現れ来たって、私たちを救う働き。親鸞聖人が如来といわれた場合、①阿弥陀如来、②諸仏、③釈尊（釈迦）、のいずれかを指すが、ここでは阿弥陀如来のこと。

▼これより依経段では、親鸞聖人が真実の経典と示された『無量寿経』によって、阿弥陀如来の徳を讃えておられます。

○**法蔵菩薩**　法蔵とは、阿弥陀如来が覚りを開き仏となられる前の菩薩の名前。菩薩とは、覚りを求めて修行する求道者のこと。

○**世自在王仏**　法蔵菩薩に説法をして求道心を起こさせた師仏。世に自在なる慈悲と智慧を備えた優れた仏の意。過去に五十三の師仏が誕生されている。

○**観見**　「観」「見」、ともに「みる」という意。人間の分別心ではなく、法蔵菩薩の観察（かんざつ）の力。

「観」の異字体。古の仮説に依拠

大弘誓（法蔵菩薩の願い）

私たちの迷いを解決していくこの上ない願い。「すべての衆生を救う」という法蔵菩薩の願いを、過去から聞われた、かねてからの本当の願いという意味で、「本願」といいます。この願いは、時代を超えて人類の歴史よりも遠い永遠の昔に願われ、今、わたしの許に届いています。本願は『無量寿経』の四十八の願い（四十八願）に集約され、また、その中でも特に根本の願いという意味で第十八願のみを本願ということもあります。

つづきはご購入いただいてお楽しみください。